

地域素材を活用した絵画表現
—土絵の具による教材研究—

Painting expressions utilizing regional materials :
Research on teaching materials with paints made from soil

大畑 幸恵

OHATA, Yukie

武庫川女子大学 学校教育センター紀要

第6号 2021年

地域素材を活用した絵画表現

-土絵の具による教材研究-

Painting expressions utilizing regional materials :
Research on teaching materials with paints made from soil

大畑 幸恵*

OHATA, Yukie*

キーワード:土絵の具 絵画 発想法 他教科との関連

1 : はじめに

筆者は地域素材を活用した絵画表現の研究を行っており、貝殻や土で絵の具をつくる授業等を2010年から学校や美術館で行なってきた。特に貝殻については、筆者の出身地・広島に堆積した大量の牡蠣殻を見つけた時から、採取する喜びと何か作ってみたいという意欲の高まりを強く実感している。現代のように安定した画材などない太古の人類にとって、表現したい時に素材を探しにゆく心境はどのようなものであったのだろうか。もしかすると材料が先で、そこにあった素材を見て、近くの石壁になぐりがきを始めることもあったのかもしれない。

教育現場では絵の具やペンなどの画材が種類豊富に入手でき、使用される。絵の具は美しい基本色とのびのよい固さで、子どもたちはいきいきと表現活動に取り組める。では、表現のはじまりを絵の具作りから行くと、どのような効果があり、どのように表されるのであろうか。小学校図画工作の指導要領には第1学年及び第2学年で取り扱う材料として土が挙げられ、第3学年及び第4学年では水彩絵の具が明記されている。小学校図画工作の教科書にはかねてより土を用いて絵に表す教材があり、令和2年発行の教科書にはその掲載頁が増した。土を用いて絵を描く事は、自然や郷土への愛着を育み、土のおいしさや触覚などによってさらに表現欲求を高める効果があると推測される。

そこで本稿では、教育学科の学生を対象に授業内で土採取と絵の具作りを行ったのち絵画表現を試み、その結果を考察することとした。絵の具の作り方については先に書いた論文⁽¹⁾に記載しており、本論は土絵の具で得られる発想の広がり、表現欲求を高める指導方法を探ることを研究目的としている。2章では教科書を中心に土を使った絵画表現の先行事例をあげ、3章では発想を広げる授業実践について述べる。そして作られた作品について分析を行い、4章および5章でワークシートやアンケートからわかる効果と課題を考察していく。

2 : 教科書掲載例と研究事例

2-1 教科書

日本文教出版の図画工作教科書をもとに変遷をみていく。平成16年発行「5・6上」p8-9には、「ザラザラ画面」と題した教材に土を用いた表現があり、土でざらざらの表面を作った上に水彩絵の具で描く手法が掲載されている。平成23年発行の「5・6上」p.20には、「せんとくのりをませた水で土をとく」とある。どこで土を探すか、どんな色の違いがあるか、土の感触を楽しみながらということが示されている。作例として動植物や竹といった自然物を表したもののや、「土の心」というタイト

* 教育学科講師



ルで想像したものを表した作品も掲載されている。平成 27 年発行の「5・6 下」pp.36-37 には、材料の感触を楽しみながら表す活動として、液体粘土などと併用して土を用い、割り箸や布なども画面に貼り合わせた作例が並び、どれも激しい凹凸があり、抽象的な世界観が表現されている。令和 2 年発行の「3・4 上」pp.48-49 (図 1) では、集めた土をふるいにかけて、「せんたくのりや木工用接着剤」をまぜてつくる方法が掲載されている。手や指で感触を味わって表現を行う子どもの様子とともに、花を描いた

作例や、「いろいろな土のり」というタイトルで画面に活発になぐりがきされた作品も掲載されている。また同書の表紙を開いてすぐの一面には、土をコレクションする美術家である栗田宏一が、同書のために「土のライブラリー2018」と題して制作した日本各地の土の見本が掲載されている。

以上の通り、教科書にあった土の絵画的な教材は、〈土で下地を作る〉、〈コラージュ素材として用いる〉、〈土絵の具を作って描く〉という 3 通りであった。土絵の具で何を描いたかについては、動植物や自然描写と抽象的な表現が半々であった。

2-2 さまざまな年齢層を対象とした土絵の具の先行研究

保育や幼児教育の場では、土にふれ感覚を働かせて遊ぶ活動が日々行われている。保育園児に対しての取り組みとして竹内 (2016) は、土を乳鉢ですり合わせ、ふるいにかけて、でんぷんのりを混ぜてつくった絵の具で〈好きな生き物〉をテーマに描いた事を考察している。(2)

古川ら (2013) は、〈描画材の成分について小中高で学習したか〉を大学生にアンケート調査し、ほとんどいなかったことを述べている。そして彼らに対して、土や植物の絞り汁などで絵の具づくりの授業を行い、学生たちは葉っぱや玉ねぎなどの具象物を描いていた。(3)

東京都教育委員会による平成 26 年度教育研究員研究報告書には、小学校 3 年生を対象に「ツチナカワールドへようこそ」という題材で授業実践が掲載されている。「土の中や地底世界をイメージしながら、豊かに想像した世界を工夫して描くことを楽しむ。(p.17)」ことを目標にし(4)、アリやモグラといった生き物を連想させながら土絵の具を作るとともに、絵本の読み聞かせを行って想像の世界へと誘って絵に表す活動への導入を図っている。土絵の具作り～制作にかけた授業時数は 6 時間であった。先に挙げた 2 つの研究と比較すると、土絵の具作りよりも発想や表現に重点をおいた計画となっている。

以上のように、近年、土絵の具を作る活動は保育園児～大学生にわたって試されていることがわかる。土絵の具を作る方法はふるいなどである程度細かいものを集める点は共通しており、筆者もこれまで授業実施してきた。その上で課題に感じているのは、絵に表す活動の中身の設定である。簡単なふるいがけの場合は土のザラザラ感が強く、手指で大胆に絵の具を置くことを楽しめる反面、筆での描写はし難くなる。土を水で攪拌・沈殿・ろ過させる場合は、理科の実験のような観察の楽しみがあり、筆で滑らかに描くことが可能となるが、ろ過の時間は 90 分以上を要する。これらのことを教育者が理解し、何を目的に活動するのか、絵を描き始める際にどのような言葉かけをするのが重要と

なってくるのである。

3：研究目的及び方法

3-1 実践概要

- ・研究目的：土絵の具づくりとそれを使った創造性を高める授業を实践し、提出作品、ワークシート及びアンケート⁽⁶⁾から、土絵の具で得られる発想の広がり、表現欲求を高める指導方法について検証することを目的とする。
- ・時期：2018年9月
- ・対象：大学 教育学科2年後期選択科目「感性を育む造形表現の展開」履修者計45名
- ・実践内容：土絵の具をつくる、描く、鑑賞するというステップで3回実施した。

前振り：土を探して来よう 乾燥させよう

1回目：土のふるいがけ、沈殿、ろ過（待ち時間に顔料の解説を行う）

2回目：ボンドや洗濯のりを混ぜた土絵の具でためしがき、絵画表現

3回目：鑑賞、額装への発展

3-2 実践内容

【1回目】土のふるいがけ・ろ過の時間を生かして



図2 土を絵の具にする手順



図3 絵の具の材料見本⁽⁵⁾

授業の前の週に、土で絵の具をつかって絵を描く事を伝え、どんな場所で採取できるかを話し合い、両手山盛り程度集める事、天気予報を見て晴れの日採取する事、採取して数日は新聞紙の上で乾燥させる事を確認しあった。

1回目の授業ではまず集めた土の色を見比べ、採取場所を紹介しあった。黄土色～濃いこげ茶の色があり、さらさらした土やふわふわした土、ゴツゴツ粒子が感じられるものなどが集まった。採取場所は大学のグラウンドや花壇、公園、自宅の庭や畑、河川敷などであった。土はふるいがけを行なった後、カップに土と水を混ぜ合わせ、数秒待ってうわ水を新聞紙やコーヒーフィルターに注ぐ事を繰り返した。土と水を混ぜたらどうなるかを問いかけ、土の粒子の大小や沈殿する仕組みに気づかせた。学生から「理科とつながっている」「地域によって本当に色が違う」という声が上がった(図2)。

沈殿・ろ過する過程では待ち時間が生じる。その時間に〈絵の具＝顔料＋展色剤〉の仕組みを解説し、筆者が集めたい広島の特産品、ミャンマーの石、膠、アラビアゴムなどの実物を触りあい、土色の豊かさと自然物への期待感を高めた(図3)。

ろ過をする理由は、〈筆で描ける程度の絵の具〉を目指したためであった。絵の具の仕組みを理解し、水加減を工夫することや、粒子の大小での描き心地を味わうことに比重を置いた。指やヘラで大胆により土の感じを味わって描く場合は、ふるいがけのみで十分である。

【2回目】土絵の具での絵画表現 -発想を広げる

ろ過を終えた土と展色剤(今回は木工用接着剤と洗濯のり)をスプーンで混ぜ合わせて土絵の具を作った。比率は土1:展色剤1弱が適しており、比率の違いで透明感が増すことや剥落することを伝えた。筆を使って画用紙に試し書きを行なったのが下の図4である。



図4 土絵の具を塗ってみよう

ワークシートには、土絵の具の感触や見え方への感動、水加減や筆使いを工夫している様子が書かれていた。自分の土絵の具を試し塗りしたあと友人同士で絵の具交換をして楽しみ、指でかく・割り箸でひっかく・採取地のメモをするなど、一人一人が絵の具への活発な興味を裏付けるワークシートであった。

- ・絵の具ができるまでを実際に体験してみて、絵を描いてみたい気持ちが高まった。
- ・人の手がかかった温かい絵の具のよう。
- ・土の中にキラキラしたものがある。さらさら、ざらざら。すーっとのびるものもある。
- ・点々よりも、線でのばしてみるとはっきりと色の違いがみられたので自然の面白さを感じた。
- ・水で薄めたものが描きやすい。
- ・薄めずに描いた土って感じが好み。
- ・茶色といっても幅があり、粘り気やざらつきなどもとても面白かった。
- ・茶色の絵の具を出して描くよりも味が出てあたたかい印象になった。
- ・普段の絵の具では出せない土の感じ。
- ・素朴さが表れて、ほっとする絵になる。土の柔らかい色が好きだ。

試し塗り終えた後、「土から何をイメージしますか」と問いかけ、マインドマップを用いて学生自身にテーマを考えさせた。板書や各自のワークシートをまとめたのが図5である。はじめに出てくるのは花や野菜、虫といった概念的なもので、次第に木の実やジャガイモ、ミミズなどより具体的な動植物の様子が出てきた。そして採取した場所やそこで活動した記憶、土に関係する物語、自然現象、地球の歴史にまでイメージが広がるとともに、暖かい・冷たい・ざらざら・楽しい・踏む・命といった感覚的なものや目に見えないものへの印象を書き出す学生もいた。

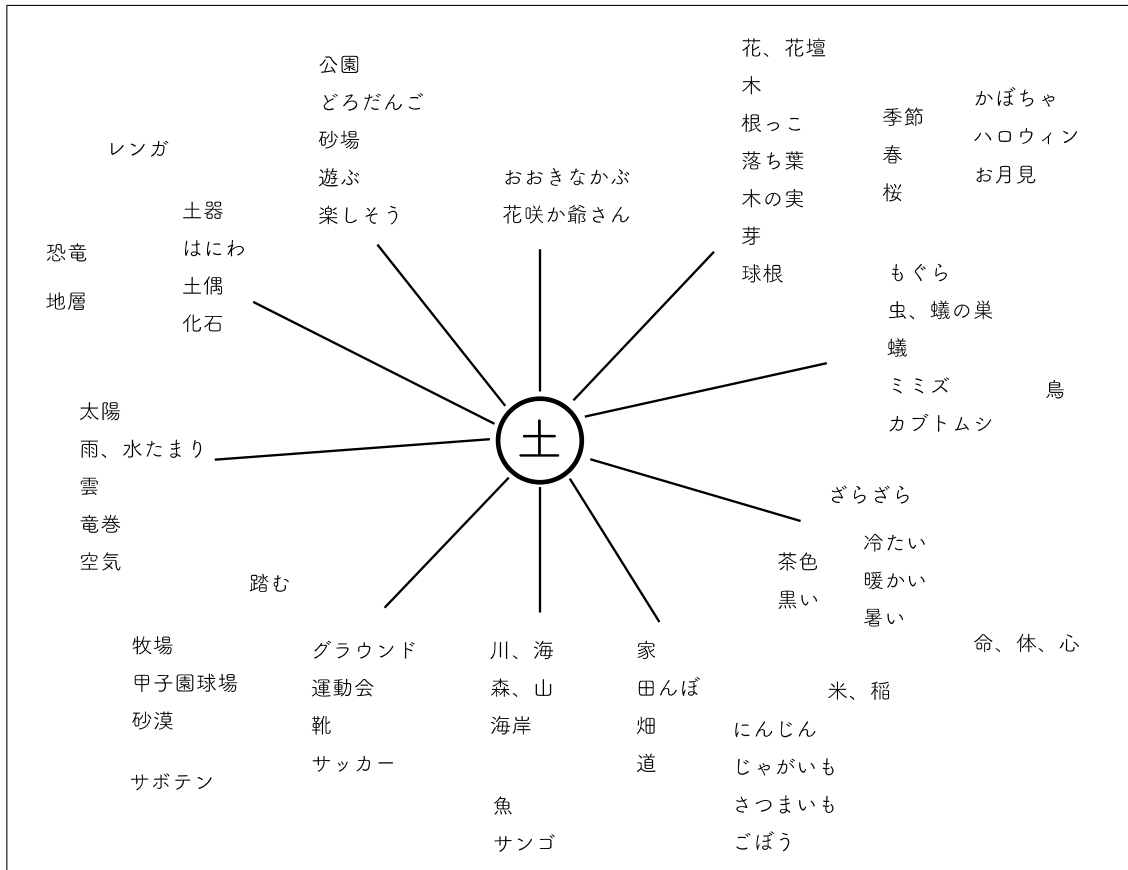


図5 土から想像してみよう

このようにして、土でどんなことを表現したいかイメージを膨らませて制作をはじめた。制作にはクラスメイトのいろいろな土絵の具を使いあって良いこととし、必要であれば土絵の具にごく少量の水絵の具を加えても良いこととした。過半数は土のみで描いていた（図6）。ワークシートには、自己のイメージの広がり、他者の表現の多様性についてさまざまな意見がかかれた。

- ・土からイメージを広げていったので、自分が描くものを見つけることができる。
- ・色々連想したら思いもよらなかったことにまで広がって面白い。
- ・作品一つ一つ土からイメージするものが異なっていたので人のイメージは面白い。
- ・土と密接なものを表していたり、温かさや冷たさを表現していた。
- ・小学生の頃、グラウンドでつむじ風がよく発生していたのを思い出して懐かしい気持ちになった。
- ・土絵の具に水彩絵の具を混ぜると、普段の水彩絵の具と違って柔らかい印象になる。

植物類をイメージした作品群



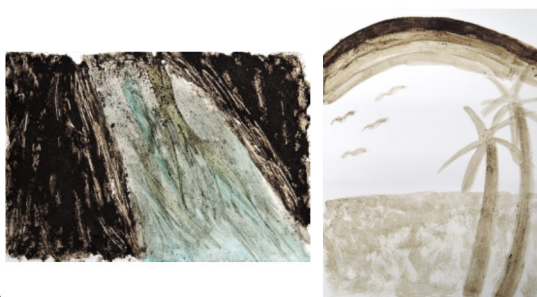
物語『おおきなかぶ』を連想し、カブと共に生き物を描いている。左は繊細なタッチ、右は激しいモデリングや筆のかすれが美しい。

細筆や竹串で点描が見られる。制作時期は9月下旬であった。稲穂のまわりをアキアカネが飛ぶ様子や、お月見の様子を描いている。

生き物をイメージした作品群



場所をイメージした作品群



時代を遡ってイメージした作品群



図6 土から想像した作品群1

思い出の様子をイメージした作品群



絵の具元になる土や鉱物などに強い関心を寄せ、結晶や粒子の様子をイメージして描いた。

図7 土から想像した作品群2

図6のように、授業者の言葉かけで描くイメージは広がっていったことがわかる。そして土絵の具の独特の色味や風合いに惹かれながら、指や筆で大胆なタッチや盛り上げを行った作品、竹串で表す細い線や水加減を意識して重ね描きした作品が生まれた。また図7のように泥団子づくりの楽しさや、グラウンドに巻き起こる風の記憶、絵の具の元になる鉱物など、土に関連したそれぞれの強い記憶が絵に表れた。

【3回目】鑑賞および額装への発展

2回目に描いた作品を全員で鑑賞するところから3回目の授業を始めた。土から生じるイメージの多様性にそれぞれが驚いていることがわかった。そして、土で描いた作品をさらに発展させる試みとして、作品のかざりつけを行なった。この取り組みは、素朴な土の絵を引き立たせるための額装であり、土の絵を切って別の用紙に貼って世界観を広げたりする学生もいた(図8)。土で出来た土器に花を活けた作品、ダンボールをグラウンドに見立てて土絵の具で描いた靴を切り取って貼った作品、土偶の絵の周りに採取した葉っぱなどをコラージュした作品など、さらなるイメージの展開があった。



図8 かざりつけした作品

ワークシートには、かざりつけ前後の印象の変化や、授業方法への気づきが書かれた。

- ・絵だけだと素朴でそれはそれでいい。
- ・飾り付けをすることによって、土の色を殺さずに土の色に目がいくようになった。
- ・授業の展開方法は組み合わせが無限。

4：アンケート結果

3回の授業を終えて学生にアンケートを行い、39名の回答を得た(図9)。問1の「土を絵の具にする事は地域や自然、他の教科への興味関心が高まる」には、「とてもそう思う」25人、「そう思う」14人だった。問2の「持参した土で絵の具をつくることは、表現への興味関心が高まる」には39人中32人が「とてもそう思う」と回答した。問3「絵の具を作る工程はやりやすかった」は「とてもそう思う」11人、「そう思う」15人、「ふつう」8人、「あまり思わない」が5人であった。この工程で工夫が必要だと思うところを尋ねると、「土集め～乾燥」14人、「ろ過」14人、「展色剤の混ぜ合わせ」14人となった。土集めの際は、色々な土が集まった方が描画を楽しめそうという理由で子どもへの呼びかけに工夫を要する事や、ふるいにかけるためにしっかりと乾燥させる段取りが重要である。ろ過の工程は、沈殿～採取までの待ち時間をどう活用するか、もう少し手軽に行う方法はないかという意見があがった。ろ過時間で描画材のなりたちを解説する事や、短時間のふるいがけのみで粗い土絵の具を味わう授業も可能である。問4「土からイメージしようというテーマで発想の広がりを感じた」は「とてもそう思う」14人、「そう思う」20人で、先に述べた学生ワークシートのコメントの通りである。イメージするものを発表してもらい、多様な考えがあることを共有して描画を始めたのも効果があったと推測する。問5「作品の飾り付けを通して、印象の変化を楽しめた」は「とてもそう思う」が31人、問6「友人の作品を鑑賞して、表現方法やテーマの多様性を感じた」は「とてもそう思う」が28人、問7「小学生も楽しめそうな教材だと思う」は「とてもそう思う」が31人であった。

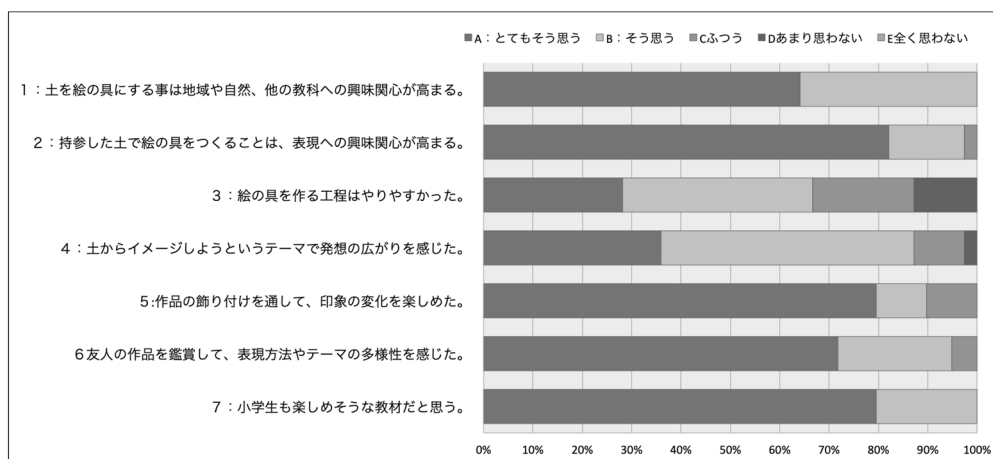


図9 アンケート結果

5：おわりに

この授業実践は土絵の具で得られる発想の広がり、表現欲求を高める指導方法について検証することを目的として教育学科の学生に対して行なった。土への興味やイメージの広がり、他者の表現の多様性への気づきは、アンケートによって高い評価が確認できた。小学生も楽しめそうだという意見が多数あったが、指導者自身が絵の具にする工程をどの程度行うかを意識することが大切である。それによって、荒い粒子を手指で味わう活動や、微粒子の土で描画を主軸にした活動にするなどねらいが異なってくる。参考となるのは採集した土を並べてみせる栗田宏一と、土で装飾的に描画する浅井裕介の作品群である。(図10,11) また、今回の実践研究では、授業3回目に作品の飾り付けという発展的な活動を取り入れ、印象の変化や指導者としての授業の膨らませ方に触れた。このように授業方法の多様性をみせることで、指導者自身が発想の選択肢を持つておくことの重要性を伝えた。



図10 栗田宏一の作品 (7)



図11 浅井祐介の作品 (8)

海洋学者のレイチェル・カーソンは、子どもたちが持つ「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目をみはる感性」を保ち続けていくためには、「私たちが住んでいる世界のよろこび、感動、神秘などを子どもと一緒に再発見し、感動を分かち合ってくれる大人」が必要だと述べている。レイチェルは、神秘さや不思議さに目をみはる感性があれば、「生きていることへの新たなよろこびへ通ずる小道を見つけ出」し、「生き生きとした精神力」を持っていけると考えていた。(9)

土で絵の具を作りイメージを広げていくことを通して、自然素材の美しさを感じ、アートの世界が生活や社会とつながっていく事を期待すると共に、指導者自身が感性を働かせる事を願っている。本論はその一例として、表現の多様性を探ったものである。

注・引用文献

- (1) 大畑幸恵「地域素材を活用した絵画表現 —カキ殻の表現素材としての有効性と素材学習—」『福山市立女子短期大学紀要』39, 2011, pp.43-48.
- (2) 竹内啓「土で絵の具をつくり絵を描く」『川村学園女子大学研紀要』27, 2016, pp.29-37.
- (3) 古川由子他「自然素材を用いた絵具作りと描画に関する研究」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』17(2), 2013, pp.81-89.
- (4) 東京都教育庁指導部指導企画課「平成26年度 教育研究員研究報告書 小学校・図画工作」
<http://www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.jp/09seika/reports/files/kenkyuin/sho/zuko/h26sho-zuko.pdf> (閲覧2020年9月13日), pp.17-20.
- (5) (1) p.46 から引用。
- (6) 作品およびアンケートを論文で使用することは、後期の授業説明時とアンケート用紙配布の時に説明し、許可を得ている。
- (7) 栗田宏一『土のコレクション』株式会社フレーベル館, 2004, pp.2-3.
- (8) 浅井裕介『この場所で作る』求龍堂, 2016, pp.12.
- (9) レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』新潮社, 1996, p.23,p.50.

参考文献

- (1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 図画工作編』平成30年
- (2) 日本文教出版『図画工作5・6上』平成16年
- (3) 日本文教出版『図画工作5・6上』平成23年
- (4) 日本文教出版『図画工作5・6下』平成27年
- (5) 日本文教出版『図画工作3・4上』令和2年